

依存性と自意識の二側面との関連 —青年期における二者関係に焦点を当てて—

田宮沙紀¹・岡本祐子¹

Relation between dependency and two aspects of self-consciousness
-Focusing on dyadic relationships in adolescence-

Saki Tamiya and Yuko Okamoto

In this study, we focused on dyadic relationships in adolescence and examined the dependent appearance for significant other and the relation with two aspects of the self-consciousness. Two aspects of the self-consciousness are public self-consciousness and private self-consciousness. As a result of factor analysis, it was indicated that adolescents have mature and immature dependencies on significant others and dependent anxiety was observed regardless of the object of dependence. Furthermore, there was a positive correlation between dependence and public self-consciousness, as well as between an object orientation factor expressing an emotional approach to significant others and private self-consciousness. Participants (N=233, 115 man, 113 female) were divided into four groups according to the scores on the dependence scale. A one-factor analysis of variance was conducted with groups as the independent variable and public/private self-consciousness as the dependent variable. The results indicated significant differences between the groups in both types of self-consciousness. It is suggested that private self-consciousness develop through relationships with others and is necessary to build interdependent relationship with others.

Key Words : dependency, significant other, self-consciousness

問題と目的

我々は他者と関わりながら生活を営む。対人関係は我々の生活にとって欠かせないものであり、相互に影響を及ぼしている。対人関係の一つの様相に「対人依存」が挙げられる。対人関係における依存性とは「道具的な価値ではなく、精神的な助力を求める要求」とされる(高橋, 1968)。

従来の依存性研究では依存性は個人内の問題として捉えられ、自立と対極関係にあり未熟なもの

¹広島大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Hiroshima University)

として扱われてきた。幼児期以降の依存は退行的な心性として問題視された(江口, 1966)ため、青年期以降の依存性はその病理に焦点が当てられた。依存の病理として依存性人格障害が挙げられる。DSM-IV (American Psychiatric Association, 1994)では「世話をしてもらいたい」、「しがみつきたい」という過剰な欲求と愛着を維持するために服従的な行動が特徴として挙げられている。また、従来過剰な対人依存性は心因性の抑うつ、アルコール依存、情緒的問題との関連が論じられてきた(Hirschfeldら, 1977)。その他の依存性の病理として自己愛性人格障害や共依存がある(西川, 2000)。さらに、抑うつや摂食障害との関連も報告されている(竹澤・児玉, 2008)。

一方、依存性の発達的变化や適応的側面など、依存性の肯定的な側面に関する研究も行われている。高橋(1968)は、依存性と自律性は対極概念ではなく、自律性は依存性の発達・変容を通して獲得されるものと捉えた。高橋(1968)は依存性を①依存要求の強度、②依存の様式、③依存の対象の3要因から依存性に接近し、依存性の発達を①対象の分化・数の増大・範囲の拡大、②様式の直接的なものから象徴的なものへの変化、③要求の充足の仕方の、直接的から間接的、現実的から象徴的なものへの変化、と捉えている。さらに関(1982)は、依存性を「人に普遍的なものであり、発達に伴って消失するのではなく、より成熟したものに変容していく」と定義した。そして高橋の考えに基づいて依存性のあり方を「依存欲求」、「依存拒否」、「統合された依存性」の3つから捉え、依存のあり方と適応との関連を検討した。依存欲求とは「援助・慰め・是認・注意・接触などを含む、肯定的な顧慮・反応を、他者に求める欲求」であり、依存拒否とは「顕在的には他者に対する依存を拒否する形で現れるが、潜在的に依存不安があると推測される態度」である。統合された依存性とは「成熟し、安定し、統合された人格に備わっているべき依存性」である。統合された依存性は成熟した依存性であり、この状態において、依存性は他者との相互依存的な良好な関係を保ち、自己が自立的になるために必要不可欠な心性である。そのため、成熟した依存性は他者との良好な人間関係を維持するためにはむしろ必要なものであると言える。これらの研究より、近年では依存性は否定的、肯定的意味のみを持つのではなく、どちらにも働きうる両価的な心性であることが示されている(関, 1982; 竹澤・小玉, 2004)。このように、依存性は発達とともに消失するのではなく、成熟した人格にも見出されるものであり、他者との良好な対人関係を維持するためには必要なものであると言える。そのため、依存性の問題とは依存性の存在ではなく、そのあり方と考えられる。

依存性を捉える視点として「自己制御」が提出されている(西川, 2000; 2003; 宮本・恒吉, 2008)。これは依存性を表出の様式や行動面から捉えるものである。西川(2000)によると、自己制御とは一般的に自分の欲求や意思にもとづいて自発的に行動調整する力である。自己制御には、自己主張的制御と自己抑制的制御の二側面が存在する(柏木, 1986)。自己主張的制御とは、「自分の意思や欲求を明確に持ち、それを他人の前で表現し主張すること」であり、自己抑制的制御とは「集団場面で自分の意思や欲求を抑制・制止しなければならないとき、これを抑制すること」である。この二側面は依存性の表出・抑制として捉えることが可能である。すなわち、自己主張的制御は依存性の表出や行動化であり、頼む、求めるといった形である。自己抑制的制御は依存性の抑制であり、我慢や制限といった形である。自己主張の未熟さは仲間への過剰な依存や一体化のような過剰な依

存性として、自己抑制の未熟さは過剰な分離意識のような依存拒否として現われる(西川, 2000)。依存性は依存対象との相互的な関係性において成立するものである。そのため、依存性が適切に機能するためには依存状態における自身に対する注意や意識が求められる。これらより、他者との関わりの中で適切に依存欲求を表出、あるいは抑制するには自身の欲求や心の動きを把握することが必要だと考えられる。

これらを踏まえると、成熟した依存性には依存対象との関わりにおいて自身の在り方に注意を向け、理解に努めることが必要である。そこで、本研究では自身に対する注意付けとして自己意識を取り上げ、依存性の様態と自己意識の程度の間を調査する。

自己意識とは「自己に対する注意の向けやすさの個人差」として定義され、注意の向けやすい方向により公的自意識と私的自意識に区別される(菅原, 1984)。公的自意識は他人から観察可能な行動や外見に対する意識であり、私的自意識は性格などの自己の内面に対する意識である。公的自意識は他者の存在に対する敏感さに関係すると考えられる(藤瀬・古川, 2005)ことから、他者視点からの自己に対する意識として捉えることが可能である。私的自意識は自分の感情へ注意を向け、それを理解しようとする(辻, 2004)である。両者の相違は立脚する視点であり、これは「他者の存在の仕方」と言い換えることができる。公的自意識は他者の存在を必要とする(渡辺, 2004)ものであり、この点において対象を必要とする依存性と共通している。菅原(1986)によると、公的自意識が強い者は他者から賞賛されることや拒否されないことを対人場面における重要な目標としており、集団への帰属感を求める傾向が強い。これは依存性の「他者からの肯定的な顧慮や承認を求める欲求」(関, 1982)と類似すると考えられる。また、依存不安は依存することに対するネガティブな態度であるが、その根底には「相手が自身を受容してくれる」という他者信頼及び「受容されるに足る自己」であるという自己信頼の欠如が示唆されている(竹澤・小玉, 2004)。したがって、依存不安は他者からの否定的評価に敏感であると考えられる。

一方、私的自意識と依存性の関係は先行研究を概観してもあまり見受けられない。依存性との関係が報告されている抑うつにおいて、私的自意識との関係が見出されている程度に留まる。

抑うつとの関係が報告される一方、私的自意識には適応的側面も数多く見出されている。菅原(1984)は、私的意識が高い者はその時々において自分の意見・態度を自覚しているため、態度と行動の間の一貫性が高いと報告している。また、高野・丹野(2009)らは自己への注目は自己理解を促す要因として捉えており、気分制御や問題解決へと至る手段として適応的側面を見出している。依存対象との二者関係において、自身の依存性を自覚することは適切な関係を保つためにも必要であると考えられる。

以上より、本研究は依存性尺度の下位因子得点を高低ごとに分類し、その群間において公的・私的自意識の得点に差が見られるのかを検討する。依存性の下位因子得点の高低の組み合わせを用いるのは、それが個人の依存性の様態を表すと考えられるためである。

ところで、先行研究では依存性を2点の視点から捉えている。一方は依存性を特定の対象を仮定せずとも成立する「個人のパーソナリティ」として捉える視点である。他方は対象となる者を想定する「特定の他者との二者関係における依存性」と捉える視点である。依存とは対象となる他者が

存在するために成立する現象であり、必然的に他者と自己との関係が想定される。そのため、本研究では特定の依存対象に対する依存性に焦点を当てるものとする。依存対象は個人にとって情緒的に傾注する人物であることから、重要な他者であると考えられる。重要な他者とは個人が非常に重要と感じる他者を指し、主に両親や親友、恋人や配偶者などの親しい他者を指す用語として用いられる(石井・竹澤, 2011)。重要な他者との関係は人間生活の生物学的・情緒的な側面において個人に与える影響が直接的でかつ重要と考えられる(永田, 2005)ため、本研究において特定の依存対象に焦点を当てることは意義があると考えられる。

依存の対象となる者は発達とともに変化することが明らかにされている。特に青年期において依存の対象は母親を主とする養育者から、友人や恋人へ変化する(高橋, 1968)。このような依存対象の変化は青年期の発達課題としても捉えられる。また、依存の対象が単に変化するのみでなく、多くの対象に分化し拡大するとともに各対象によって向けられる依存性も異なることが明らかとなっている(高橋, 1968; 福田・小川, 1988; 田中・高木, 1997)。これらの結果は、親や友人、恋人といった関係性によって依存対象へ向けられる依存性が異なることを示している。しかし、これらの研究では特定の他者に対する依存性を測定しているものの、関係性というカテゴリ別の検討に留まっている。そのため、カテゴリに類型することによって個々の関係の固有性、すなわち対象に対する個人の重み付けが見落とされてきた可能性が懸念される。

これまで、依存性を測定する質問紙が数多く開発されている(辻, 1969; 関, 1982; 田中, 2003; 竹澤・小玉, 2004)。しかし、依存性の否定的な面だけでなく、適応との関連を捉える質問紙はごく少数である。本邦では関(1982)の依存性尺度が挙げられるが、この尺度は一般他者に対する依存性を測定するものである。そのため、現時点では特定の他者に対する依存性を適応との関連から捉える質問紙が見当たらない。そこで予備調査において関(1982)の尺度の文言を変更し、特定の他者に対する依存性の検討を行う。また、重要他者に向けられる依存性と本来の尺度において測定された一般他者に向けられる依存性との比較検討を行う。これらが明らかになれば、重要他者に対する依存性についてより詳細な理解が可能となるであろう。

予備調査

方法

調査協力者 A県4年生大学に通う大学生 大学生142名 有効回答129名 有効回答率90.85%(男性66名, 女性63名, 平均年齢19.83歳 $SD=1.19$)。

調査時期 2011年11月中旬。

手続き 複数のサークルに調査協力を依頼した。サークル活動時間の一部を用いて一斉に質問配布、回収を行うという集団調査形式で行った。なお、本研究ではいかなる調査においても、調査に関する説明を行い、同意を得られた者に対し回答を依頼した。実施時間はおよそ20分であった。

質問紙の構成 フェースシート、依存性尺度(関, 1982)。

1. フェースシート: 年齢・性別・依存対象者との関係性を選択、回答を求めた。依存対象者の選択肢及び教示文は先行研究(高橋, 1968; 田中・高木, 1997)にならった。

選択肢：①父親，②母親，③同性の友人，④異性の友人，⑤恋人，⑥その他（自由記述）

教示：「あなたにとって重要な人」と定義し，以下のように教示した。

あなたの存在を心理的に支える人であり，心のより所である者であり，最も頼りにしている者。

2. 依存性尺度：関（1982）によって開発された依存性を測定するもの。下位尺度「依存欲求」，「依存拒否」，「統合された依存」各 13 項目，計 39 項目からなる。「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の 5 件法で回答を求めた。依存対象となる者を想定して回答がなされるように，尺度の文言を一部変更して用いた。例）人といつも一緒にいたい。→____といつも一緒にいたい。

統計処理については spss14.OJ を用い，分析を行った。また，本研究において，統計学的有意水準は 5%未満とした。

結果

選択された重要な他者の内訳

調査対象者によって選択された依存の対象となる「重要な他者」の対象の割合を Table 1 に示した。同性・異性いずれかの友人を選択した者は全体の過半数を占め，父親・母親いずれかの親を選択した者は全体の約 3 割であった。恋人を選択した者は全体の 15%ほどであった。その他には「ペット」や「将来会ってみたい人」などの回答が含まれたが，本研究の対象外であるとみなし，以後の分析から除外した。

Table 1

選択された重要な他者の内訳

	人数(人)	割合(%)
1:父親	12	9.30
2:母親	24	18.60
3:同性・友人	55	42.64
4:異性・友人	12	9.30
5:恋人	20	15.50
6:その他	6	4.65
合計	129	100.00

依存性尺度の因子構造の検討

重要な他者用 最尤法・バリマックス回転によって因子分析を行った。因子負荷量を考慮し，2 因子を抽出した。負荷量が.40 に満たない 7 項目を除き，再度因子分析を行った。第一因子は関（1982）における依存性尺度の下位尺度「依存欲求」と「統合された依存」項目が混在した。これらの項目は，依存の対象となる者に対して積極的な関心や情緒的関わりを志向するものである。そのため第一因子を「対象志向」と命名した。第二因子は項目内容が概ね本来の尺度の下位尺度である「依存拒否」と一致した。しかし項目の内容を検討した結果，依存の「拒否」よりも依存することに対する「不安」の方が妥当と考えられたので「依存不安」と命名した。また，各因子の内的整合性を α 係数によって確認したところ，「依存性」は.92，「依存不安」は.75 であった。内的整合性は第二因子「依存不安」がやや低い値であったものの，ほぼ十分な信頼性が確認された。一方，累積寄与率は 37.42 と不十分であり，尺度の妥当性に疑問が残った。

一般他者用 最尤法・バリマックス回転によって因子分析を行った。因子負荷量を考慮し，3 因子を抽出した。負荷量が 0.4 に満たない項目及び複数の因子に高い負荷量を示す項目を除き，再度因子分析を行った。本研究で得られた因子構造は先行研究（関，1982）と一致した。そのため先行研究にならい，第一因を「依存欲求」，第二因子を「依存拒否」，第三因子を「統合された依存」とした。内的整合性を α 係数によって確認したところ，「依存欲求」=.86，「依存拒否」=.85，「統合された依存」=.84 であり，十分な信頼性が確認された。累積寄与率は 40.1 であった。

考察

重要な他者に向けられる依存性について

予備調査において得られた2つの依存性尺度の因子構造は異なるものであった。本来の尺度である一般他者用では3因子構造が認められ、先行研究と一致する結果を得た。一方、重要な他者用では2因子構造が得られた。因子の内容に注目すると、第一因子「対象志向」では本来の尺度の下位尺度「依存欲求」と「統合された依存」の項目が混在していた。依存欲求とは肯定的な顧慮や反応を他者に求める欲求であり、統合された依存とは相互依存的で成熟した依存性を示す。本来、「依存欲求」と「統合された依存」は適応や成熟という観点上で分類を異にするものである。従来の研究では、依存欲求と統合された依存は発達的には同時には存在し得ない(天貝, 2001)とされてきた。関(1982)は「統合された依存性が高い人は、むしろ、依存欲求はあまり高くないと予想される」と述べている。「依存欲求」の強さと「統合された依存」の強さは比例するものではなく、成熟や適応の状態によって二者の程度は異なると考えられる。成熟へと向かう過程において、依存欲求は低下する一方、統合された依存は高まると予想される。しかし、本研究の結果は対象が特定の者に限定されたとき、未熟な依存性から成熟した依存性まで幅広く対象に向けられることを示している。そのため、重要な他者に対しては相互依存的な成熟した依存性を向けつつ、未熟な依存性も包含している、あるいは未熟な依存性を向けつつ、ある面では成熟した依存性を向けていると考えられる。

一方、「依存不安」因子は本来の尺度から文言を変更しても、概ね一貫した結果を得た。したがって、「依存不安」は依存性を向ける対象に関わらずに存在する心性であることが見出された。本来の尺度では「依存不安」因子に該当する因子名は「依存拒否」である。拒否とは拒む、はねつけるといった意味合いが強い。しかし項目の内容を検討すると、依存することに対する不安が色濃く、それゆえ拒否に繋がると考えられる。したがって本研究では第二因子を「依存不安」と命名した。先行研究では依存拒否の高さは通常、不適応的とされてきた(関, 1982; 竹澤・小玉, 2004)。しかし、今回調査対象とした大学生は自我同一性の確立が課題として挙げられており、また社会的には社会に出るための準備期間として自立への過渡期とされる時期である。したがって、高い依存拒否も「成長へ向かっている」状態の表れであるならば、即、不適応には繋がらないと言える。高坂・戸田(2006)が述べているように、依存不安の高さは「独立意識の表れ」とも捉えることが可能であり、それは対象が父親や母親であったとき、最も了解されるであろう。

依存性プロフィールの検討

依存性の成熟度や適応を判断する手がかりとして、先行研究(関, 1982)では依存性下位尺度の組合せをプロフィール化する手法が取られてきた。これは依存性を3因子構造で捉えており、各下位尺度の得点の高低によって8つのプロフィール(2×2×2)を見出している。本研究で得られた依存性尺度の因子構造は、対象を「特定の他者」と限定したために2因子構造を得た。そのため直接先行研究の知見に沿うことはできないが、先行研究(関, 1982; 高坂・戸田, 2006)を参考に下位尺度の高低の組合せが表す依存性の様態を推察した(Table 2)。

Table 2
依存性プロフィールの内容

	対象志向	依存不安	依存性プロフィール
LL群	低	低	対人関係が希薄，あるいは対人関係に対する関心が小さい。
HL群	高	低	対象への志向性が高く，比較的安定している。 依存欲求の割合が高い場合は幼児に近い型であり，未成熟な状態にある。
LH群	低	高	独立への意識が強く，比較的安定している。青年期においては成長過程にある者が多い。
HH群	高	高	依存対象に両価的な依存性を向けており，多少不安的な型である。 依存欲求が強い場合は適応上の問題を有す可能性がある。

本研究では依存性プロフィールが個人の適応や成熟とどのように関連するかは明らかではない。特に対象志向には未熟な依存性から成熟した依存性までが包含されていると考えられる。そのため，対象志向の成熟の程度によって依存性プロフィールも異なると考えられる。今後，これらの点を検討するために自己安定性や自己像の肯定度など，他の尺度との関連を検討することが求められる。

本調査

方法

調査協力者 A県内の4年生大学に通う大学生254名 有効回答223名 有効回答率87.80% (男性115名，女性113名，平均年齢20.12歳 $SD=1.42$)。

調査期間 2011年12月中旬～下旬。

手続き 講義時間の一部を用いて質問紙を配布し回答を求め，その場で回収する集団形式で実施した。調査に関する説明を行い，同意を得られた者に対し回答を依頼した。実施時間はおよそ15分であった。

質問紙の構成 フェースシート，自意識尺度(菅原，1984)，依存性尺度(関，1982)。

1. フェースシート：年齢，性別，依存対象となる「重要な他者」1名を想定し，その者との関係を選択させた。選択肢及び重要な他者の教示文は予備調査と同じである。
2. 自意識尺度・重要な他者用：21項目，5件法。菅原(1984)が作成した自身に対する注意の向け方及び方向性を測定する尺度。重要な他者に向けられる自意識を測定するために，尺度の文言を変更した。例)___からの評価を考えながら行動する。
3. 依存性尺度・重要な他者用：39項目，5件法。予備調査にて作成したものを使用。重要な他者に向けられる依存性を測定する。

分析方法 依存性尺度の下位因子(「対象志向」と「依存不安」)について，それぞれを高群・低群に分類し，その組み合わせから4群を設定した(依存性プロフィール)。その後，各群が公的自意識及び私的自意識に及ぼす影響を検討した。統計処理についてはspss14.OJを用い，分析を行った。また，本研究において，統計学的有意水準は5%未満とした。

結果

選択された重要な他者の内訳

選択された依存の対象となる「重要な他者」の割合を Table 3 に示した。母親と父親いずれかを選択した者が全体の約 4 割であった。同性の友人は最も選択された割合が高く、異性の友人と合わせて約 4 割を占めた。恋人が占める割合は 15% であった。「その他」の回答には「いない」や「自分」、「兄弟」が挙げられた。これらは回答数の少なさや本研究の対象外（「いない」、「自分」）と考えられる回答であったため、以降の分析では除外した。

重要な他者用・自意識尺度因子分析

最尤法・バリマックス回転によって因子分析を行った。因子負荷量を考慮し、3 因子を抽出した。負荷量が 0.40 に満たない 1 項目を除き、再度因子分析を行った。結果を Table 4 に示した。累積寄与率は 47.84 であった。第一因子は本来の尺度の「公的自意識」の項目に相当するものであったため、「公的自意識」とした。同様に第二因子も「私的自意識」に相当したため「私的自意識」とした。第三因子は世間体や噂など、特定の他者以外を想定した項目内容やであったため、「第三者の視点」と命名した。また、内的整合性を α 係数によって確認したところ、「公的自意識」=.92、「私的自意識」=.85、「第三者の視点」=.70 であったため尺度の信頼性は確認された。

Table 3

	人数(人)	割合(%)
1:父親	9	3.61
2:母親	85	34.14
3:同性・友人	97	38.96
4:異性・友人	5	2.01
5:恋人	37	14.86
6:その他	16	6.43
合計	249	100.00

Table 4
自意識尺度因子分析結果 バリマックス回転後の因子パターン

	I	II	III
第一因子「公的自意識」 (7項目 $\alpha=.91$)			
15 ____の前で何かををするとき、自分のしぐさや姿が気になる。	0.90	0.08	-0.04
10 ____の目に映る自分の姿に気を配る。	0.83	0.00	0.06
7 ____に会うとき、どんなふう振る舞えば良いのかき気になる。	0.82	-0.06	-0.11
9 ____に見られていると、ついこっこうをつけてしまう。	0.78	0.06	-0.08
14 自分の発言を____がどう受け取ったか気になる。	0.76	0.05	0.10
5 自分が____にどう思われているか気になる。	0.70	0.01	0.26
21 ____からの評価を考えながら行動する。	0.64	0.14	0.06
第二因子「私的自意識」 (8項目 $\alpha=.84$)			
18 つねに自分自身を見つめる目を忘れないようにしている。	0.05	0.77	0.00
16 自分が本当は何をしたいのか考えながら行動する。	0.03	0.68	0.03
6 しばしば、自分の心を理解しようとする。	0.09	0.65	0.21
2 自分がどんな人間か自覚しようと努めている。	0.05	0.63	0.22
11 その時々気持の動きを自分自身でつかんでいたい。	0.11	0.63	0.27
8 ふと、一歩離れた所から自分をながめてみることもある。	-0.04	0.62	0.09
20 他人を見るように自分自身をながめてみることもある。	0.04	0.56	0.12
12 自分を反省してみるが多い。	0.04	0.45	0.36
第三因子「第三者の視点」 (5項目 $\alpha=.69$)			
4 自分についてのうわさに関心がある。	0.13	0.09	0.67
13 自分の容姿を気にするほうだ。	0.10	0.23	0.56
17 世間体など気にならない。	0.06	-0.05	-0.55
1 初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気づかう。	0.05	0.16	0.47
19 自分自身の内面のことには、あまり関心がない。	0.13	-0.33	-0.41
因子寄与	4.31	3.40	1.86
累積寄与率	21.53	38.53	47.84

重要な他者用・依存性尺度の因子分析結果

最尤法・バリマックス回転によって因子分析を行った。因子負荷量を考慮し、二因子を抽出した。負荷量が.40に満たない項目を除き、再度因子分析を行った。結果をTable 5に示した。第一因子は予備調査における「対象志向」に対応する項目内容であった。同様に第二因子も「依存拒否」に対応する項目内容から構成された。また、各因子の内的整合性を α 係数によって確認したところ、「対象志向」は $\alpha=.92$ 、「依存不安」は $\alpha=.84$ であり、十分な信頼性が確認された。累積寄与率は36.43と低い値であった。

Table 5
依存性尺度因子分析結果 バリマックス回転後の因子パターン

	I	II
第一因子「対象志向」 (23項目 $\alpha=.92$)		
8. 思い出すだけで、心が安らかくなるような____がいるので、落ち着いていられる。	0.70	0.07
37. ____のことを思い浮かべて、元気を出すことがある。	0.70	-0.01
16. うれしいこと、楽しいことはまず____に相談したい。	0.68	-0.21
5. 困っている時や悲しい時には、____に気持ちを分かってもらいたい。	0.66	-0.26
19. 何かをする時には、____に気を配ってもらいたい。	0.65	0.07
23. 自分を見守ってくれるように思う____がいるので、大事な場面も切り抜ける。	0.64	-0.11
1. ____から、「元気ですか」などと気を配ってもらいたい。	0.63	0.09
32. 病気の時や、ゆううつな時には、____に同情してもらいたい。	0.62	-0.03
25. 心の支えとなってくれる____がいる。	0.61	-0.27
7. できることなら、どこへ行くにも____と一緒にいきたい。	0.59	0.19
31. できることなら、いつも____と一緒にいたい。	0.58	0.20
11. ____とは、ささえ合って生きていくものだと感じる。	0.57	-0.06
29. 自分の信頼できる____がいるので安心だ。	0.55	-0.21
14. 最後は自分で決めるにせよ、困ったときには、信頼のできる____の意見もきいてみる。	0.54	-0.41
12. 何かにつけて、____に見方になってもらいたい。	0.54	-0.04
28. むずかしい仕事をする時には、できたら____と一緒にいたい。	0.53	0.17
26. ____と自分の立場を尊重しつつ、必要な時には、うまく頼ったり頼られたりするほうだ。	0.52	-0.14
22. 重要な決心をする時は、いつも、____の意見が聞きたい。	0.50	-0.11
35. 何かに迷っている時には、____に「これで良いですか」と聞きたい。	0.48	-0.13
20. 私がどんなことをしようと理解してくれる、と思える____がいる。	0.48	-0.21
36. 直接手助けをしてもらわないが、____に話をするだけで、自分の判断がしやすくなることもある。	0.46	-0.27
3. 一人で決心がつかねる時には、____の意見に従いたい。	0.45	-0.14
4. 一人ではどうにもならない時は、その時々で適当な____に相談する。	0.45	-0.36
第二因子「依存不安」 (10項目 $\alpha=.84$)		
33. ____に頼る立場になると、どうも落ち着かない。	-0.01	0.76
39. 自分のことを____に相談するのは、何か不安である。	-0.14	0.72
13. 安心して、____の世話になれないほうだ。	-0.08	0.70
9. ____の世話になるのは、恥ずかしいと思う。	-0.01	0.62
21. ____に頼みごとをするのは、どんな時でも、非常な決心がいる。	0.14	0.58
6. どんなに困った時でも、____に頼らないほうだ。	-0.33	0.58
2. 自分のために、____に何かやってもらうのは苦手だ。	-0.07	0.55
10. 恩返しできないのなら、____に助力を求めるのはためらわれる。	0.12	0.47
15. 自分のことは、どんなことがあっても自分一人でしないと気がすまない。	-0.11	0.43
27. 親しい間柄の____にも、甘えることのないほうだ。	-0.15	0.41
	因子寄与	7.82 4.36
	累積寄与率	23.71 36.93

依存性尺度・下位尺度得点による群分け

依存性尺度の下位尺度である「対象志向」と「依存不安」をそれぞれ中央値を基準に高・低に分け、その組合せから4群を設定した。各群の記述統計量を Table 6 に示した。これより、対象志向得点・依存不安得点ともに低い群を LL 群、対象志向得点が高く依存不安得点が高い群を HL 群、対象志向得点が高く依存不安得点が高い群を LH 群、対象志向得点及び依存不安得点どちらも高い群を HH 群とした。

Table 6
各群の群分け

組合せ			対象志向		依存不安	
対象志向	依存不安	(人数)	M	range	M	range
L	L	(n=52)	61.29	25-74	18.5	12-23
H	L	(n=64)	86.39	75-115	18.5	11-23
L	H	(n=69)	61.55	30-74	30.12	24-44
H	H	(n=48)	83.31	75-111	29.1	24-42

依存性尺度及び自意識尺度の得点の男女差

依存性尺度の得点の平均・標準偏差及び男女差の *t* 検定の結果を Table 7 に示した。依存性尺度合計点及び下位因子「対象志向」では女性の方が(それぞれ $t(223)=4.03, p<.001$), ($t(223)=-7.01, p<.001$) 「依存不安」においては男性の方が ($t(223)=5.06, p<.001$), 有意に高かった。同様に、自意識尺度の得点の平均・標準偏差及び男女差の *t* 検定の結果を Table 8 に示した。自意識尺度合計得点及び「私的自意識」では女性の方が有意に高かった (それぞれ $t(223)=-2.56, p<.05$), ($t(223)=-3.97, p<.001$)。 「公的自意識」では男女差は認められなかった ($t(223)=-0.17, n.s$)。

Table 7
依存性尺度の得点の平均・標準偏差, 及び男女差の *t* 検定の結果

	全体 (N=233)		男性(n=118)		女性(n=115)		男女差の検定 <i>t</i> 値
	M	SD	M	SD	M	SD	
合計	114.61	17.98	110.07	20.11	119.26	14.12	-4.03***
対象志向	72.80	15.63	66.37	15.92	79.39	12.27	-7.00***
依存不安	24.13	6.90	26.27	7.02	21.92	6.06	5.06***

*** $p<.001$

Table 8
自意識尺度の得点の平均・標準偏差, 及び男女差の *t* 検定の結果

	全体(N=233)		男性(n=118)		女性(n=115)		男女差の検定 <i>t</i> 値
	M	SD	M	SD	M	SD	
合計	66.21	10.22	64.54	10.36	67.92	9.84	-2.56*
公的自意識	17.49	6.97	17.41	6.96	17.57	7.00	-0.17, n.s
私的自意識	28.65	5.34	27.32	5.69	30.01	4.60	-3.97***

* $p<.05$, *** $p<.001$

依存性下位尺度と自意識下位尺度間の相関

依存性尺度と自意識尺度の下位因子間の関連を確認するため、相関係数 (Pearson) を求めた。結果を Table 9 に示した。対象志向と公的自意識 ($r=.38, p<.01$), 対象志向と私的自意識 ($r=.28, p<.01$) 及び依存不安と公的自意識 ($r=.30, p<.01$) に有意な正の相関が認められた。また、依存不安と私的自

意識において相関は認められなかった ($r=-.06$, $n.s$)。

Table 9
各尺度間の相関

	対象志向	依存不安	公的自意識	私的自意識
対象志向	-	-1.18	0.38**	0.28**
依存不安	-	-	0.30**	-0.06
公的自意識	-	-	-	0.17
私的自意識	-	-	-	-

** $p < .01$

依存性プロフィールによる公的自意識・私的自意識の分散分析

依存性プロフィールによって公的自意識及び私的自意識の得点に差が見られるかを検討するため、依存性の下位尺度の組合せを独立変数、公的自意識及び私的自意識を従属変数として一元配置分散分析を行った。結果を Table 10 に示した。公的自意識・私的自意識ともに群間において有意な差が認められた (公的自意識($F(3,229)=14.96$, $p<.001$), 私的自意識 ($F(3,229)=6.77$, $p<.001$))。そのため多重比較 (Tukey 法) を行った。分析の結果、公的自意識では LL 群と HL 群・HL 群と LL 群の間に有意差が認められた。得点の順位は得点が低いものより順に LL 群<LH 群<HL 群<HH 群であった。私的自意識では LL 群・LH 群, LL 群と HL, 及び LH 群と HH 群で有意な差が認められた。得点の順位は小さいものより順に LH 群<LL 群<HH 群<HL 群であった。

Table 10
公的自意識及び私的自意識の分散分析の結果

	LL ($n=52$)		HL ($n=64$)		LH ($n=69$)		HH ($n=48$)		F値
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
公的自意識	12.87	5.53	18.14	7.03	17.73	6.25	21.31	6.65	$F(3,229)=14.96^{***}$
私的自意識	27.33	5.87	30.58	4.99	27.13	4.90	29.69	4.90	$F(3,229)=6.77^{***}$

*** $p < .001$

群と関係性による公的自意識・私的自意識の二要因分散分析

依存性プロフィールと重要な他者との関係性の交互作用を検討するために、以下の分析を行った。依存性プロフィール (LL 群, HL 群, LH 群, HH 群) と関係性 (両親・友人・恋人) による 4×3 の 2 要因分散分析を行った。従属変数は公的自意識得点及び私的自意識得点であった。

まず、公的自意識において分析の結果、依存性プロフィールと関係性の相互作用は認められなかった ($F(6,221)=.316$, $n.s$)。公的自意識では依存性プロフィールの主効果は認められず ($F(3,221)=.42$, $n.s$)、関係性においてのみ主効果が認められた ($F(2,221)=26.8$, $p<.01$)。そこで Tukey の多重比較 (5% 水準) を行ったところ、両親・友人・恋人いずれにおいても有意な差が認められ、関係性によって公的自意識の得点が異なることが明らかとなった。得点の順位は低いものより順に両親<友人<恋人であった。

続いて、私的自意識得点についても同様の分析を行った。その結果、私的自意識得点においても依存性プロフィールと関係性の交互作用は認められなかった ($F(6,221)=.658$, $p=n.s$)。また、依存性プロフィール及び関係性の主効果も認められなかった。

考 察

依存性尺度の因子構造男女差

本研究で得た依存性尺度・重要な他者用の因子構造は予備調査の結果とほぼ一致するものであった。得点の平均値の男女差を算出したところ、依存性尺度の合計得点及び「対象志向」では女性の方が、「依存不安」では男性の方が有意に高かった。先行研究においては、「統合された依存」及び「依存欲求」は女性の方が、「依存拒否」は男性の方が高いことが報告されている（関，1982；久米，2001）。「積極的関わり」が「統合された依存」と「依存欲求」を包含する因子であることから、今回得られた男女差は先行研究の知見と一致すると考えられる。本研究の結果は、社会的に女性は依存することが受容される一方で、男性は自立を求められる傾向があるという社会的背景（長尾・笠井・鈴木，2003）を反映したものと考えられる。そのため、一般他者に向けられる依存性のみでなく、重要な他者に向けられる依存性も同様に社会的望ましさが内在化されていると考えられる。

自意識尺度の因子構造及び男女差

本研究は二者関係に焦点を当てるため、重要な他者以外を指す「第三者の視点」因子は研究の対象から除外した。得点の平均値の男女差を検討したところ、自意識尺度の合計得点及び、私的自意識においては女子の方が有意に高かった。公的自意識においては男女差が認められなかった。先行研究では、青年期においては男性より女性の方が公的自意識・私的自意識ともに高いことが報告されている（菅原，1984）。堀井（2002）によると、女性は他者に自らが受け入れられるかといったことや、他者からどのように見られ、評価されるかといったことに過敏になりやすい性質をもつとされる。そのため男性よりも女性の方が公的自意識が強いとされてきた。しかし、本研究においては公的自意識における男女差は認められなかった。すなわち、対象が不特定多数の一般他者ではなく特定の者であったとき、男女差は生じないことが明らかとなった。この理由として、自己及び対象に対する信頼感が挙げられる。本研究では本人にとって最も親しい者を想起させ、回答を求めた。そのため、依存の対象は本人にとって信頼する人物であることが推察される。信頼する人物に対しては自分が拒否されたり評価されたりされるのではないかという懸念が低いと、公的自意識が低下したと考えられる。さらには、人に受け入れられていると感じるためには自分が人に受け入れられるだけの価値があるという感覚が必要である（竹澤・小玉，2004）ことから、重要な他者との二者関係においては他者信頼感のみでなく自己信頼感も高いことが推察される。

依存性プロフィールと自意識の関連

分散分析の結果は、依存性尺度と自意識尺度の下位因子ごとの相関関係を反映したものであった。「対象志向」因子は「公的自意識」及び「私的自意識」と正の相関関係にあり、「依存不安」因子は「公的自意識」のみ正の相関が認められた。また、「依存不安」と「私的自意識」間には関連が認められなかった。

公的自意識については依存性プロフィールによって得点に差が認められ、得点は小さい順に LL 群、LH 群・HL 群、HH 群の 3 グループに分かれた。依存性はその成立の条件として他者を必要とする心性であり、公的自意識も他者の存在を必要とする点で依存性と共通している（菅原，1994）。そのため「対象志向」及び「依存不安」と「公的自意識」間に正の相関が認められたと考えられる。

LL 群は予備研究の依存性プロフィールより、他者との関わりが希薄であり、他者への関心が薄い群である。他者との関わりが希薄である者はそのために他者に対する注意が低く、結果として他者視点からの自己への注意付けの程度も低まると考えられる。HH 群は 4 群中最も公的自意識得点が高かった。依存性プロフィールによると HH 群は対象へ接近する欲求が高い一方で、対象との関わりを回避する欲求も強い群である。回避と接近という両価性は対象に対する葛藤と捉えることが可能である。青年期においてこの葛藤は親密な対人関係を求める中で引き起こされるものであり(藤井, 2001), 対象との心理的な距離の取り方に難しさを感じていると考えられる。そのため、対象からどのように見られているかということにとらわれ、公的自意識が高まったと推測される。これらを踏まえると、対象志向と依存不安からなる依存性は高すぎても低すぎても個人の精神的健康や適応を損ねる可能性があり、他者と成熟した関係を構築するためには適度な依存性が必要であると考えられる。

私的自意識については、分析の結果、依存性プロフィールによって私的自意識の得点に差があることが認められた。さらに、私的自意識の得点は小さい順に LL 群・LH 群, LL 群・HH 群, HL 群・HH 群の 3 グループに分かれた。私的自意識の得点は依存性プロフィールの「対象志向」因子得点の高低に対応していた。本来、私的自意識は自身の内面への注意付け(菅原, 1986)であるため、直接的に他者の存在によって影響を受けるとは考え難い。しかし、本研究では私的自意識と対象志向の間に正の相関関係が認められた。このことは他者への志向性が高い者は自己の内面への注意付けが高いことを示すと考えられる。本研究の結果では「対象志向」因子における依存性の成熟の程度が明らかではない。しかしながら西川 (2003) は成熟した依存性には、「自身の依存に対する自覚」が備わっているとし、そのために自己制御が可能となると述べている。また、大学生になると自己の心身感覚、気分、感情、思考などの内面的・私的な自己の受容が高まり、ある程度の安定感をもって自己内省が深まるとされる(堀井, 2001)。この知見を踏まえると、「対象志向」得点が高い群 HL 群, HH 群において私的自意識が高いことは、「統合された依存」の割合が大きく、成熟した依存性の状態にあることが考えられる。これらより、私的自意識の程度にも他者の存在が関連し影響を及ぼしていることが明らかとなった。すなわち、私的自意識は他者に志向し、他者との関わりの中で高まる可能性が示された。一方で「依存不安」と「私的自意識」のみ関連が認められず、それぞれに独立したものであることが明らかとなった。

さらに、依存性プロフィールと関係性を独立変数、公的自意識・私的自意識を従属変数とした二要因の分散分析を行った結果、いずれも相互作用は認められなかった。私的自意識については依存性プロフィール、関係性いずれの主効果も認められなかった。公的自意識においては関係性の主効果のみ認められた。関係性別に公的自意識の得点を比較すると、両親が最も低く、次いで友人、恋人という結果を得た。これらより、公的自意識の高低は、個人の依存性プロフィールではなく、「重要な他者」との関係性に依拠する部分大きいことが示された。今回調査対象とした大学生は依存の対象が親から友人、恋人と移行し、対象に向ける依存性も変容する過渡期にある。これまで最も依存性を向けていた親に対しては既に信頼感が確立されており、そのため自己受容感も安定し、評価懸念などを含む公的自意識はあまり働かないと考えられる。一方で友人や恋人は青年期に重要性

が増す存在であり、これらの者と親密な関係を築くことができるかは青年の適応に重要な影響を及ぼす重要な問題である。新たに関係を築き、深化させていくことが重要な課題である青年期において、重要な他者からの評価は自己を脅かし得る重要な問題であり、そのため「重要な他者に自分がどう映るか」ということに敏感になると考えられる。しかし、本研究では重要な他者と公的自意識の関連の詳細は明らかではない。今後青年期における依存性の対象の変化と、公的自意識の得点の差異の関連についての検討が求められる。

本研究では依存性と自意識の因果関係は明らかではないが、依存性は生後直後から存在する心性であり、自意識に先行するものと考えられる。未熟な依存の状態にある者は自身の依存を自覚することができないため欲求のままに振舞い、成熟した依存の状態にある者は自身の依存を自覚し、その上で依存性を適切に制御し他者と良好な関係を築くとされる。本研究では、公的自意識は依存対象に接近する対象志向と対象を回避する依存不安の両方と正の関連を持つことが明らかとなった。さらに公的自意識との関連において対象志向及び依存不安が依存対象に適度に向けられることが個人の適応に必要と考えられた。また、私的自意識も対象志向と正の相関を持つことから、自身の内面に対する注意付けも他者との関わりの中で発達していく可能性が示唆された。自己制御やその前段階となる自身への注意付けは自身の態度や行動に関するものであるために自身で制御しやすく、そのため心理教育場面での介入を考える際に有効で重要な視点とされる(竹澤, 2008)。自身に対する注意付けを扱った本研究は、今後依存性の問題を考える際、また対応する際に有効な知見となると考えられる。依存性とは人間の本質的な性質を表す。そのため依存性の理解が深まることで、対人関係の様々な問題に対する理解も深まり、問題解決や介入の一助になると考えられる。

本研究の限界と今後の課題

本研究の課題は以下の二点である。まず、依存対象となる者の選択肢が広範であり、本研究で用いた尺度で同一の依存性を測定し得たのか、という点である。すなわち、様々な対象に向けられる依存性を同一の尺度で測定し、比較することが妥当であったか、という問題である。加えて、本研究で用いた尺度は元来、対象を一般他者に設定したものである。本研究では文言を変更して用い、「重要な他者」に特有の因子構造を見出した。しかし、累積寄与率の低さなど、尺度としての妥当性及び信頼性が十分であったとは言い難い。依存の対象となる者、すなわち「重要な他者」に対する依存性の概念の更なる検討及び尺度の改良が求められる。

二点目は、本研究にて得た「重要な他者」に対する依存性尺度の下位尺度の組合せ(依存性プロフィール)が個人の適応や成熟にどのように関連するかが明らかでない点である。本研究では重要な他者に対する依存性の2因子構造を見出したが、その組合せのもつ意味は従来の3因子構造からの推察に留まった。今後の研究では他の尺度との関連を検討し、依存性プロフィールが表す個人の発達状態を明らかにすることが望まれる。自己像の肯定度や自己安定性、自尊心や自我同一性の達成などとの関連を検討する必要がある。

引用文献

- 天貝由美子 (2001). 現代大学生の依存性に関する一考察(1) 大阪教育大学紀要, **50**, 79-91.
- American Psychiatric Association 1994 *Quick Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-IV*
Washington D.C. : Auther. 高橋三郎・大野 裕・染谷俊幸 (1995). DSM-IV精神疾患の分類と診断の手引き 医学書院
- 江口恵子 (1966). 依存性の研究 教育心理学研究, **14**, 1, 45-58.
- 福田 周・小川捷之 (1988). 対人関係における依存と性役割 横浜国立大学教育紀要, **28**, 21-39.
- 藤井恭子 (2001) 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究 **49**, 2, 146-155.
- 藤瀬文子・古川久敬 (2005). 自尊感情と自己認知との関係性：他者からみられている自己に着目して 九州大学心理学研究, **6**, 189-197.
- 堀井俊章 (2001). 青年期における自己意識と対人恐怖心性との関係 山形大学紀要(教育科学), **12**, 4, 88-100.
- 堀井俊章 (2002). 「青年期における対人不安の発達の变化(続報)」 山形大学紀要(教育科学), **13**, 1, 79-94.
- 石井辰典・竹澤正哲 (2011). 重要他者の意味尺度の作成 上智大学心理学年報 **35**, 51-59.
- 柏木恵子 (1986). 自己制御の発達 (self-reguration) の発達 心理学評論, **26**, 1, 3-24.
- 久米禎子 (2001). 依存のあり方を通して見た青年期の友人関係：自己の安定性との関連から 京都大学大学院教育学研究科紀要, **47**, 488-499.
- 宮本靖子・恒吉徹三 (2009). 大学生の依存欲求と依存行動について：性役割の違いから 研究論叢, 芸術・体育・教育・心理, **58**, 231-239.
- 永田彰子 (2005). 生涯発達の観点からみた重要な他者との関係に関する研究の動向と展望：発達初期の重要な他者との関係が後の発達に与える影響に着目して 広島大学大学院教育学研究科紀要, **53**, 401-410.
- 長尾あゆみ・笠井 仁・鈴木伸一 (2003). 青年期の親子関係と友人への依存性に関する研究 広島大学大学院心理臨床教育センター紀要, **2**, 22-35.
- 西川隆蔵 (2000). 対人依存行動の研究—依存行動について適応的観点からの検討課題— 人間文化学部研究年報, **2**, 1-17.
- 西川隆蔵 (2003). 対人依存行動の研究—対人依存の自己制御と自己意識, ソーシャルスキル, 及び対人適応感との関係の検討— 人間文化学部研究年報, **5**, 1-19.
- 高坂康雅・戸田弘二 (2006). 青年期における心理的自立(II)—心理的自立尺度の作成— 北海道教育大学紀要第, **56**, 2, 17-30.
- Hirdchfeld, R. M. A., Klerman, G. L., Gough, H. G., Baret, J., Korchin, S. J., & Chodoff, P. (1977). A measure of interpersonal dependency. *Journal of Personality Assessment*, **41**, 610-618.
- 高橋恵子 (1968). 依存性の発達の研究：I 大学生女子の依存性 教育心理学研究, **16**, 1, 7-16.
- 竹澤みどり・小玉正博 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研

- 究, **52**, 310-319.
- 竹澤みどり・小玉正博 (2006). 適応的な依存とは? : 依存概念の再検討 筑波大学心理学研究, **31**, 73-86.
- 竹澤みどり (2008). 自律的な依存の仕方が依存後の自己成長感に及ぼす影響について 筑波大学心理学研究, **35**, 65-72.
- 高野慶輔・丹野義彦 (2009). 抑うつと私的自己意識の2側面に関する縦断的研究 パーソナリティ研究, **17**, 3, 261-269.
- 田中 優 (2003). 依存要求尺度の作成,および,信頼性と妥当性の検討 大妻女子大学人間関係学部紀要, **4**, 229-239.
- 田中 優・高木 修 (1997). 中学生における社会的依存要求の特徴について 社会心理学研究, **12**, 3, 151-162.
- 辻 正三 (1969). 「依存性テスト」の検討 人文学報, **67**, 11-23.
- 辻平次朗 (2004). 自己意識と自己内省: その心配との関係 甲南女子大学紀要人間科学編, **40**, 9-18.
- 菅原健介 (1984). 自意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 3, 184-188.
- 菅原健介 (1986). 称賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について— 心理学研究, **57**, 3, 134-140.
- 関智恵子 (1982). 人格適応面からみた依存性の研究: 自己像との関連において 臨床心理事例研究, **9**, 230-249.
- 渡辺克徳 (2004). 抑うつ・公的自意識の関連について—抑うつ者に他者の存在は重要か?— 臨床教育心理学, **30**, 1, 33-37.

謝辞

本研究は2011年度に徳島大学総合科学部人間社会学科へ卒業論文として提出したものに加筆修正を施したものである。調査のために貴重な時間を割いて下さいました調査協力者の皆様、本研究に多大なる示唆とご指導を下さいました内海千種先生にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。